三重五章

序章

a. 鈴鹿馬子唄

坂は照る照る　鈴鹿は曇る
間の土山　アリャ　雨が降る

b. 櫛田川舟歌

船を出しゃれば　夜更けて出しゃれヨ
帆かげに見るさえ　気にかかるヨ
筏乗りさん　袖がぬれるヨ
襷あげたや 縄だすきヨ

第一章　伊勢国

伊勢の国は、かた国のうまし国と古語にもいひて、北のはてより南のはてまで、西の方は山々つらなりつづきて、まことに青垣をなせり、東の方は入海にていせの海といふこれなり、かくていづこもいづこも山と海の間、ひろく平原にして、北は桑名より、南は山田まで、廿里あまりがほど、山といふ物一つもこゆることなく、ひたつづきの國原なり、その間に、廣き里々おほかる中に、山田、安濃津、松坂、桑名など、ことににぎはしく大きなる里なり、

此国、海の物、山野の物、すべてともしからず、暑さ寒さも、他國とくらぶるに、さしも甚だしからず、但しさむさは、北の方へよるままに次第に寒し、風はよくふく國なり、國のにぎははしきことは、大御神の宮にまうづる旅人たゆることなく、ことに春夏の程は、いといとにぎははしき事、大かた天ノ下にならびなし、

〔本居宣長『玉勝間十四の巻』九九八〕

第二章 参宮風景

a.伊勢音頭〔道中唄〕

西行法師は　お伊勢さんへ参り
何事の　おわしますかは　知らねども
かたじけなさに涙こぼるる　と詠んで謡うて　すすり泣き
伊勢の松坂の　本居さまが　敷島の　大和心を　人とわば
朝日に匂う山桜花　と詠んでおうたは　国のはな

b.伊勢の手まわし

〔神風や伊勢の宮ほど、ありがたきは又もなし。〕

一生に一度はご参宮をと、信心深い人々が、諸国からはるばるやってくる。

ことさら春は人の山、飾りたてた乗掛馬もひっきりなしに、二三百人の揃い装束の講まいり、御師の宿に落ちつけば、東西十ヶ国がいりみだれ、二千、三千の泊まり客。一体どんな才覚で、本膳、二の膳を客に出すのか、台所には二十人ほど、これですべてを調える。

まず、膳立て係の三人が、椀、箸、皿を揃えて出せば、御飯は煮え湯にしかけた籠で炊き、汁の魚は俎使わず、じかに大なべに切り入れる。膾を刻むは玄人の仕事、一斗銀二分で一石は刻む。刻んだ膾は大盥(たらい)で和える、鍬でまぜれば出来上がり。

まあここまではありそうなことだが、二千人前の焼魚、焼き立てを出すとは余りに不思議。火鉢の五十もあるかと思いきや、わずか三人鼻唄まじりで埒があく。四角い籠に魚を並べ、大釜の湯でざっとゆで、焼き鏝で片側撫でてすぐに出す。

伊勢の焼物、両面焼くということがない。

〔よろづ此手まわし、さりとはさりとは世間各別なり。〕

〔井原西鶴「諸国の人を見しるは伊勢」より。現代語訳、ただし、〔　〕内は原文〕

第三章 万葉集の三つの歌

朗読 1.

続日本紀　巻の十三、聖武天皇　天平十二年

冬十月の二十六日、大将軍　大野朝臣　東人らに勅して曰はく、「朕意ふ所有るに縁りて、今月の末暫く　関東に往かむ。その時に非ずと雖も、事已むこと能はず」とのたまふ。二十九日、伊勢國に行幸したまふ。是の日、山辺郡　竹谿村堀越に到りて頓まり宿る。三十日、車駕、伊賀國　名張郡に到りたまふ。

十一月の朔、伊賀郡　安保頓宮に到りて宿る。大雨ふり途泥みて、人馬疲煩れたり。二日、伊勢國壱志郡川口頓宮に到る。これを関宮と謂ふ。車駕、関宮に停り御しますこと十箇日。

万葉集の三つの歌

1. 河口のほ
2. 野邊に廬りて夜の經れば　妹が手本し思ほゆるかも〔1029　大伴家持〕
3. 妹に戀ひ吾がの松原見渡せば　潮干の潟に鶴鳴き渡る　　〔1030　聖武天皇〕
4. 御食つ國志摩の海人ならし真熊野の　小舟に乗りて沖へ漕ぐ見ゆ〔1033　大伴家持〕

朗読 2.

十二日、河口より発ちて壱志郡に到りて宿る。十四日、進みて鈴鹿郡　赤坂頓宮に至る。二十三日、赤坂より発ちて朝明郡に到る。二十五日、桑名郡　石占に到りて頓り宿る。二十六日、美濃国　当伎郡に到る。二十七日、伊勢国の高年の百姓　百歳已下七十歳已上の者に大税を賜ふこと各　差有り。

第四章 こどもの四季

1.a.田つぼどん〔四日市市富田浜町の鬼きめ歌〕

田つぼどん　田つぼどん　ひがえまいり　しよまいか
わしもちょっくら　したいが　からすという黒鳥が
五つつき五つつき　五つつついて
雨が降ると　その傷が　ざくざくと傷めまする

b.トンと落とせば〔上野市東丸之内の手まり歌〕

トトトントン　トンと落とせば　はずやに小柳
芋やりふたやにスートントン
一やドンドン　二やドンドン　三やドンドン　四やドンドン
じゃくろが一匁　じゃくろが二匁　じゃくろが三匁
さのやが一　さのやが二（五まで同様）
あのトウリンショウリンショウ　あの二リンショウ
リンショウ（五リンショウまで同様）せんもんじゃが一匁（五匁まで同様）
まず一こん貸しました

c.ひのふの三吉〔熊野市二木島町の手まり歌〕

ひのふの三吉　馬から落ちて　竹の根っこで　手のひらついて
医者にかけよか　眼医者にかけよか　医者も眼医者も　御免でござる
山でとう薬　川原でよもぎ　それをせんじて
飲ましゃんせ　飲ましゃんせ　それ一貫貸せました

d.一が刺いた〔鳥羽市安楽島町のつかまえ鬼歌〕

一が刺いた　二が刺いた　三が刺いた　四が刺いた
五が刺いた　六が刺いた　七が刺いた　蜂が刺いた

e.じゅんせじゅんせ〔一志郡美杉村のお手玉歌〕

じゅんせじゅんせと　ろくじゅんせ
伊勢の端島の着く島の　着く島小船を見て来たか
見た来た　行って来た　乗って来た
三本松原漕ぎ寄せて　ここはどこやとたずねたら
ここは熊野の酒屋町　川崎問屋と申します

川崎問屋はおらねども　娘おり
娘の御名はなんという　おせん小女郎と申します
おせん小女郎の出るときは
下にはちんちんちりめんを　上にはこんこん小柳を
お手には水晶の鈴をかけ　顔には日本の日を照らす
おせんさよなら行ってきます啼
ほにさっさ　お駕籠でさ　おにさんぐらいは
お駕籠やおみつで　乗せてのりどん
太鼓でどん　鼓でどん　どんどん御山の松原どん
ひやふ　みやよ　いちゃむに　ななや　ここやとお
ひやふ　みやよ　いちゃむに　ななや　ここやにじゅう（以下百まで同様）

2.正月っつあん〔松坂市鎌田町の正月歌〕
正月っつあんがござった　どこまでござった
三井の角までござった　なにに乗ってござった
おもちゃのような下駄はいて　ゆずり葉に乗って
ゆずりゆずりござった

3.詩かるた
一　春眠　暁を　覚えず　處處　諦鳥を聞く〔孟浩然〕
二　今春看すみす又過ぐ　何れの日か是れ帰年〔杜甫〕
三　故園　渺として何れの處ぞ　帰思　方に悠なる哉〔韋應物〕
四　牀前　月光を看る　疑ふらくは是れ地上の霜ならんかと
頭を挙げて山月を望み　頭を低れて　故郷を思ふ〔李白〕

第五章

1．鞏路感慨
馬　嘶いて白日暮れ　剣鳴って秋気来る
我が心　渺として際無し
〔詩かるたより、呂温　結句省略〕

2．三重の勾
倭建命、尾津の前の一つ松の許に到り坐ししに、先に御食したまひし時、其地に忘れたまひし御刀、失せずして猶有き。爾に御歌曰みしたまひしく、
尾張に直に向へる　尾津の崎なる　一つ松あせを　一つ松
人にありせば　大刀佩けましを　衣著せましを　一つ松　あせを
とうたひたまひき。
其地より幸でまして、三重の村に到りましし時、また詔りたまひしく、
「吾が足は三重の勾の如くして甚つかれたり。」とのりたまひき。故、其地を號けて三重と謂ふ。
愛しけやし　吾家の方よ　雲居起ち来も
〔『古事記』景行天皇〕